

<h1>HOMAS</h1> <p>日本語版 ニュースレター</p>	<p>No. 64 平成23年(2011年)12月10日発行 北海道・マサチューセッツ協会 会長 森本 正夫</p>
	<p>発行所 〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館12階 TEL011-231-3392 FAX011-231-3666 発行人 中垣 正史 E-mail homas @ siren.ocn.ne.jp</p>
<p>Hokkaido Massachusetts Society</p> <p>北海道・マサチューセッツ協会</p>	

北海道開拓の基礎を築いた指導者たち

アイヌ民族保護を訴え続けたジョン・バチェラーの生涯と業績

- 生活改善・学校・病院の設立に努力、アイヌの父として敬愛されたイギリス人宣教師 -

まえがき

「世界の文化の進歩は、凡ての人が皆生存権を有して居る様に、あらゆる民族もまた民族としての生存権が明らかに認められて参りました。之は当然なことであります。日本人が米国や其の他で、差別的待遇を受けて居ることを聞く時に、ほんとうに嫌気が致します。日本は、大いにその非を責め、又世界にむかって人類平等主義を主張せなければならぬと思ひます。それをなす前に、同国民であるアイヌ族が持つて生れた其の生存権まで奪ひ去られ、山から山へ追ひ込まれて、予防し得る病気のため地上から滅び行かんとして居る事に注目され、其の開発向上策に誠意を示さることを希望致します。」

「ジョン・バチェラー自叙伝「我が記憶をたどりて」(昭和3年10月発行)より引用-

ジョン・バチェラー博士(1854~1944)は、英国聖公会宣教師。23歳で来日して、先住民族アイヌの人々が、和人に土地を奪われ差別と迫害に苦しんでいることを知り、その救済のために北海道各地でキリスト教の伝道と同時に、その生活改善のために、各地に学校(愛隣学校)をつくり無料の病院を設立するなど、アイヌ民族の人権向上のために64年間、伝道・教育・医療などに献身的に努力しました。また、アイヌ語・アイヌ文化の研究、文字のないアイヌ語の世界初のアイヌ英和事典の編纂、出版などにより、アイヌ民族の存在を世界に広めました。

時代背景

日本の近代化・民主化は、明治維新からはじまりますが、開拓使によって進められた北海道の開拓・近代化政策は、アイヌ民族にとっては新たな侵略支配の苦難の幕開けでしかなかったのです。それは、アイヌ人に和人と同様の姓名をつけ、和人の言葉を使い同じ文字を習得させる同化政策による、いわば「植民地支配」でした。また、男性の耳輪・女性の入墨を禁止し、アイヌ民族の伝統的な祭祀や習俗にまで干渉しました。サケ漁やシカ猟の禁止によって、狩猟民族の生活手段を奪い、言語や文化的伝統を根こそぎ破壊しようとするものだったといえるでしょう。

こういう時代の流れの中で、松本十郎判官のようにアイヌの文化に理解を示す人もありましたが、アイヌ民族の人権や文化を守る仕事は、むしろ外国人の宣教師や医師によって始められました。

イギリス人宣教師のジョン・バチェラー博士は、64年間の長きにわたり、アイヌの人々のために尽くし、「アイヌの父」と呼ばれました。<バチェラー博士については、本稿で詳述します。>

また、同じくイギリスの考古学・人類学者、医師のニール・G・マンロー博士(1863-1942)は、スコットランド出身、エジンバラ大学医学部卒。1892年(明治25年)29歳の時、インド航路の船医として来日、横浜ゼネラルホスピタル病院長や軽井沢サナトリウム主任医師として働く一方、日本各地の旧

石器時代の貝塚発掘などを行っています。1905年(明治38年)には日本に帰化。1932年(昭7)からはアイヌ民族研究のため、看護士・通訳者として博士を助けた千代夫人(1885-1974)と共に、平取町二風谷に永住して、アイヌ人の衛生思想の普及に努めたり、患者を無料で診察を続け、「先史時代の日本」「アイヌの信仰と儀式」などの著作も残しています。晩年は体調を崩し、1942年(昭和17年)4月12日、79歳で死去。現在は、ご夫妻共に、二風谷共同墓地に眠っています。また二風谷には、「マンロー博士記念館」・博士が持ってきて植えたといわれるドイツウヒ並木などが保存されています。

今回は、北海道の「アイヌの父」として敬愛された、イギリス人宣教師ジョン・パチェラー博士(1854~1944)の北海道開拓時代の明治から大正、昭和の歴史に残した偉大な足跡をたどってみたいと思います。

パチェラーの生い立ち

ジョン・パチェラー(John Batchelor)は、1854年3月20日、英国ロンドン南方サセックス州の田舎町アクフィールド村で、11人兄弟の6番目として生まれます。パチェラー家は、由緒正しい騎士の家系で、当時、両親は毛織物の仕立て業を営んでいました。父は、ハートフィールド市の市長を3期も務めています。信心深い両親は子供たちに洗礼を受けさせて、自由・平等・博愛のキリスト教精神を教え込んだといわれます。パチェラーも、幼いころから、貧しき者・弱き者を助けるように教えられ、虐げられている先住民に大きな関心を持っていたといわれます。当時、世界の覇権国家であった英国は、東洋に多くの植民地を支配しており、多くのキリスト教宣教師を派遣していました。

パチェラーは、14歳で小学校卒業後、弁護士を目指しますが、弁護士試験に失敗したため、大きな農場に職を得て、働きながら夜間学校を卒業します。さらに、ロンドンのイズリントン神学校、ケンブリッジ大学神学部を卒業します。そして、母校の勧めにより、香港にある東洋で働く宣教師養成のための聖ポーロ・カレッジ入学のため、母国を離れて香港へ行くことを決意しました。

1876年(明治9年)9月22日、22歳のパチェラーは、サザンプトン港を出港、11月11日、香港に到着、宣教師養成の神学と中国語の勉強が始まります。しかし、3ヶ月ほど過ぎたころから、香港の気候風土が身体に合わず体調を崩します。夜は、百足・油虫・蚊などに攻められて不眠症になり、そして、マラリアに罹り毎日高熱が続いたといわれます。

宣教師として来日、函館へ

パチェラーは、英国と気候風土の似た土地へ転地療養を勧められて、日本行きを決めて香港を発ち、1877年(明治10年)3月15日、横浜港に到着します。早速、東京で医者診察を受けた結果、もっと寒冷の地が良いと勧められます。東京以北では、函館にしか聖公会がなかったので、函館行きを決心します。アメリカの小さな貨物船にやっと乗せてもらって、1877年(明治10年)5月1日、23歳の若き英国聖公会の宣教師の卵として函館に到着したのでした。函館では、聖公会北海道伝道の先駆者ウォルター・デニング司祭の指導を受けて、まず日本語の勉強をはじめ、半年くらい経ってからアイヌ語の勉強もはじめたようです。パチェラーは身体が快方に向かうにつれ、伝道の手伝いをはじめています。函館でアイヌ青年と出会い、日本の先住民アイヌの人たちが悲惨な生活と病に苦しんでいることを知り、当時の日本人の差別・偏見に満ちたアイヌ観に衝撃を受けます。

1878年(明治11年)秋、パチェラーは、札幌を訪問して、開拓使長官黒田清隆にも会っています。その後、日本家屋を1軒借りて札幌に滞在し、対雁(ついしかり)のアイヌ、デンペから直接アイヌ語を習っています。デンペの案内で対雁を訪ねて、アイヌの風俗習慣などについての見聞を広めています。同年12月、札幌を引き上げて帰函します。この年、正式にアイヌ伝道者に任命されています。

1879年(明治12年)5月、胆振の有珠コタンを訪問、次いで、同年9月、函館聖公会のデニング司

祭とともに、平取のアイヌコタンを訪ねて、和人からの差別と迫害を受けながらも懸命に生きているアイヌの人々に接し、これを契機にアイヌへの布教活動を決意します。パチェラーの正義感あふれる人格と熱心に唱えるキリスト教に、ペンリウク首長と平取コタンの人々は心打たれたといわれます。ペンリウク首長は、自分の家を増築してパチェラーの部屋を作ります。パチェラーは12月まで約3ヶ月滞在して、アイヌ語を学んでいます。またこの年、正式に英国聖公会の宣教師に任命され、いよいよアイヌ民族への布教と救済に全力を尽くしていくこととなります。パチェラーは、必死で日本語とアイヌ語を学び、その文化や宗教をよく理解し、アイヌ語で伝道を行っています。平取コタンの人々も、パチェラーを信じ、その話を素直に受け入れて、カムイの信仰と同時に、1人また1人と洗礼を受けたといわれます。1880年(明治13年)、デニング司祭、パチェラーを伴い、再度平取を訪問、帰途、札幌・石狩・室蘭・小樽方面も訪問しています。パチェラーはまた、翌年も平取を訪問、ペンリウク宅に6ヶ月滞在して、アイヌ語を学びつつ伝道しています。

1881年(明治14年)12月～翌年4月まで第1回英国帰国。郷里の家族や知友を訪ねて旧交をあたためた後、ケンブリッジ大学で6週間神学の特別研究をして、さらに、キリスト教を伝道する者には深い知識と教養が必要とされるとして、イズリントン神学校に再度入学して勉強をしています。

1884年(明治17年)元旦、東京英国大使館で、パチェラー(30歳)は、函館宣教師会代表ウォルター・アンデレスの妹レイザ((41歳)と結婚式を挙げています。彼女は清純なクリスチャンでした。同年1月下旬、アイヌの生活・風習・文化などを広く紹介した「蝦夷今昔物語」(和綴じ・66頁)を、<函館英国人パチロル>の名で出版しています。その後、夫人同伴で関西旅行、大阪で「アイヌ民族の風俗」について講演をしています。またこの年、夫人同伴で道内各地へ6ヶ月間の伝道旅行をします。

狩猟を禁止されたアイヌ民族の食生活の変化に伴う基礎体力の低下を心配して、パチェラーは、禁酒を強く勧めました。しかしこれが、日本人役人の布教活動に対する介入もあって、告訴事件となり、誤解を受けてコタンの人々との関係もこじれてしまいます。1885年(明治18年)、パチェラーは、住み慣れた平取滞在を打ち切り、室蘭・伊達・白老・釧路・厚岸・網走などのコタンを訪ねて、習得したアイヌ語で伝道して歩きました。

幌別へ転居

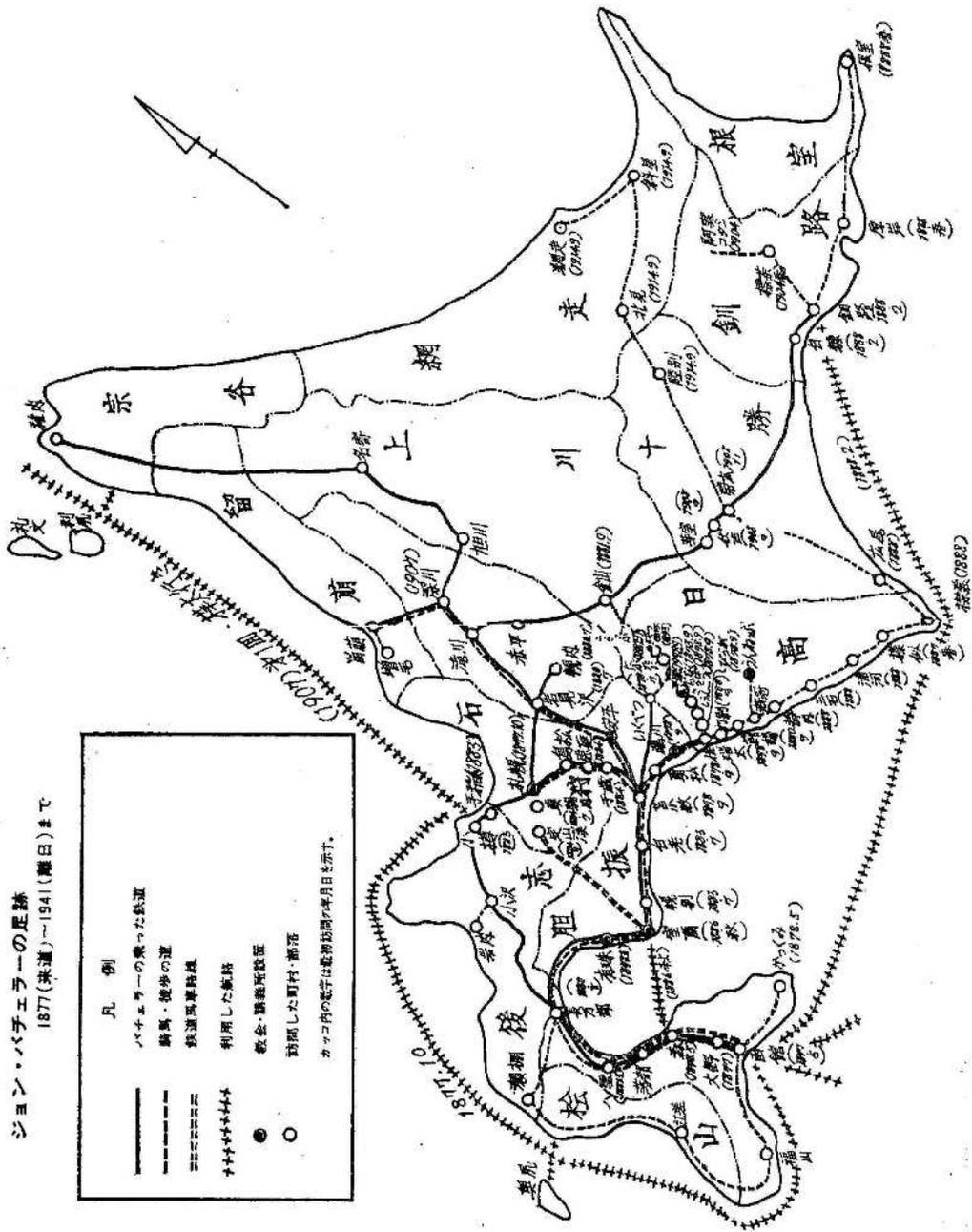
1886年(明治19年)5月、パチェラーは、レイザ夫人・養女キン、召使パラピタ夫妻の5人で、キリスト教布教のため、函館の住居を幌別に移して定住します。以後、札幌に転居するまでの6年間、ここを拠点として、遠くは日高方面までも馬に乗って布教に出かけたといわれます。1888年(明治21年)、パチェラーは、就学率の低いアイヌの子供のために、良心的な和人や伝道教会の募金を元に最初の「愛隣学校」を設立します。これが後の、全道各地のアイヌのための「愛隣学校」のモデルとなり、パチェラーはこの時の経験を活かして各地の指導にあたったといわれます。1887年(明治20年)パチェラーは、英国の伝道教会から、正式にアイヌ民族の宣教師に任命されています。

この幌別の住居は、当時、その牧場で牛を飼い・農作もしていた邸宅跡の敷石とイチイ・ポプラの木・池の跡などが僅かに面影をとどめていて、現在、史跡に指定されています。

1890年(明治23年)1月～翌年6月下旬の間、パチェラー夫妻第2回の英国帰国。英国で、ある村の牧師を6ヶ月間努めています。また滞英中に、ヨハネ福音書・マルコ福音書などのアイヌ語訳を出版しています。

1891年(明治24年)37歳の時、パチェラーは平取に戻りコタンの人々と再会、ペンリウク首長も6年前の非礼を詫びて快く迎えます。コタンの人々とも信頼関係を取り戻し、以前よりも堅い絆で結ばれた平取の人々は、次々とキリスト教に入信し、その数は100人以上にもなりました。1895年(明

治 28 年)5 月、パチェラーは、英国の伝道協会の援助を待ちきれず、自費で平取に教会堂を建てました。そして、次の伝道地 伊達町有珠へ向かいます。1896 年(明治 29 年)、ここでも、有珠コタンの信者のために教会堂を建てています。



「ジョン・パチェラーの手紙」(仁多見巖訳編)より転載

札幌に定住

1892年(明治25年)、パチェラーは、札幌に転居して、さらに伝道活動の幅を広げて、全道各地、さらに樺太の辺地にまでおよび、樺太アイヌ、ギリヤーク人、オロッコ人などにも布教活動を行っています。1898年(明治31年)札幌に住宅を新築して、ここには離日まで住んでいます。

1896年(明治29年)英国聖公会派遣の、ロンドンの病院で看護婦をしていたエディース・メアリー・ブライアント女史(1859-1934)が来日。約1年半、札幌のパチェラーのもとでアイヌ語を学び、その後、平取に赴任し、13年間アイヌの伝道・医療・私塾を開いて子弟の教育に献身的に尽しました。

<1900年(明治33年)12月～1902年(明治35年)5月の間、パチェラー第3回英国帰国>

札幌の自宅隣接地にアイヌ人のために、アイヌ民族の家屋様式を取り入れたかやぶきの無料診療所を開設します。パチェラーは、英国の伝道協会にもアイヌ民族の窮状を訴えて援助金を求めています。その経営は苦しく、パチェラーの生活費を削って入院患者の薬代に当てたりしたといわれます。その後次第に協力者も増え、札幌市立病院の関場不二彦院長もボランティア診療をしたため、その評判は全道各地に広まりました。連日遠方から訪れるアイヌの人々で、診療所はいっぱいになり、入院患者の多くがキリスト教の信仰に導かれて、身も心も癒されたといわれます。

さらに、自宅別棟に、「アイヌ・ガールズ・ホーム」を建築して、多くの身寄りのないアイヌの女子児童を引き取り、勉強を教えました。そして優秀な少女、向井八重子を支援して進学させています。

パチェラーは、1906年(明治39年)10月30日、八重子を養女に迎えますが、以後彼女は、パチェラー八重子として父親を助けて、共に各地で講演活動を行い、アイヌ民族の救済を訴え続けています。また、パチェラーは、八重子の弟・向井山雄の才能も見込んで、立教大学文学部神学科卒業まで学資の支援をしています。山雄は1918年(大正7年)卒業後、アイヌ伝道を開始、パチェラーの後継者として活躍します。また、八重子の末の妹チヨモパチェラーの世話のもとで、長じて聖公会牧師 岡村国夫司祭の妻として教会保育園の保母として尽力しています。

1908年(明治41年)12月～1910年(明治43年)4月の間、第4回英国帰国。パチェラーは、ルイザ夫人・八重子を伴って、シベリヤ鉄道経由で帰国。英国帰国直後に、日本から明治天皇下賜の勲四等の勲章が送られて感激したそうです。翌年秋、カンタベリー大僧正より神学博士の学位を贈られます。この間八重子は、パチェラー通訳により英国各地でアイヌについて講演をして寄付を受けています。

日本に帰ると、パチェラーは、明治天皇の観桜御会に招かれて、天皇に拝謁し握手を求められています。こうして、パチェラーは、アイヌ伝道者・アイヌ民族学者・アイヌ問題の権威者として、その名声は、日本全国に鳴り響いていたといわれます。

1920年(大正9年)には、アイヌ民族に中学校以上の教育を受けさせるために、寄宿舍「パチェラー学園」を創設しました。アイヌの子供たちを札幌に集めて、生活費や学費などの経済援助をして中学校以上の学校へ通学させたのです。これには有島武郎も感銘を受け、「惜しみなく愛は奪う」の道内講演旅行の講演料を寄付しています。また資金不足のため、1930年(昭和5年)、新渡戸稲造を会長とする「パチェラー学園後援会」が設立され、活発な募金運動が始められます。各新聞報道もあり、次第に寄付金が集まり、1931年(昭和6年)には待望の財団法人が認可されます。この学園からは、多くのアイヌの青少年が、教師、獣医、無線技師などとして、世に送り出されたということです。

1923年(大正12年)には、パチェラー70歳で宣教師を退職します。アイヌ民族への伝道と救済に捧げた46年間でした。しかしその後も、パチェラーは札幌に住み、北海道に骨を埋める覚悟をして活動をつづけました。こうして、人生の大半をアイヌ民族のために尽くしたので、「アイヌの父」と呼ばれました。1928年(昭和3年)10月、自叙伝「我が記憶をたどりて」を刊行しています原文ローマ

字を日本語文字に清書したのは得能松子でした。その夫は、北海道庁内務部長得能佳吉で、パチェラーによって信仰に導かれたキリスト教信者でした。彼は、後に岩手県知事になっています。また、パチェラーと長年交流のあった徳川義親公爵が序文を寄せています。。

1932年(昭和7年)5月、勲三等瑞宝章を贈られます。1936年(昭和11年)4月6日、妻ルイザ(1843,11,29生)が、老衰のため92歳で死去します。現在も、札幌円山墓地の「ルイザ・パチェラー之墓」に眠っています。同年(昭和11年)10月～翌年3月の間、第5回英国帰国。そして10月、ルイザ夫人の姪、フローレンス・アンデレスが、パチェラー援助のため来日します。

パチェラーは、アイヌ語の言語学的研究とアイヌ文化の民俗学的研究に多くの優れた業績を残し、日本のアイヌ文化研究の先駆者の1人に数えられています。著書には、アイヌの生活・文化を紹介した「蝦夷今昔物語」(1884・明17)、そして35歳の時に、北海道庁の依頼を受けて、世界初のアイヌ英和辞典・二万語におよぶ語彙を採録した「蝦和英三対辞書」(1889・明22)を出版しています。また、アイヌ語訳の聖書・賛美歌などもあり、40数冊の著書を出版しています。

パチェラーから洗礼を受けて、平取・旭川近文アイヌ部落で伝道師として布教していた金成マツ(幌別出身・1875-1961)を、1918年、金田一京助博士にはじめて紹介したのは、パチェラーでした。金成マツは、「私が函館の学校(愛隣学校・7年間)にいけたのは、パチェラー先生が推薦してくれたからです。函館の学校でローマ字を習ったから文字を持たないアイヌの私にもユーカラが書けたんです。経済的にもずいぶん先生のお世話になりました。アイヌのためにただアイヌのためにと、実に熱心に働いた人でしたからね、とても良い人でした。」と述懐しています。金成マツは、金田一京助のアイヌ語研究に協力して多くのユーカラをローマ字で記録して残しました。幌別の「カンナリ家」は、その一族から、ユーカラ伝承者金成マツをはじめ、「アイヌ神謡集」の著者知里幸恵(1903-1922)、「分類アイヌ語事典」などのアイヌ語研究の権威者となった知里真志保博士(東京帝国大卒・北大教授・1909-1961)などを輩出した優秀な家系です。<金成マツの妹、知里ナミの子が幸恵と真志保姉弟>

パチェラーの紹介が機縁となり、金田一京助博士が知里真志保を支援したのでした。アイヌ語研究に一生を捧げた知里真志保は、このパチェラーの「蝦和英三対辞書」を土台にして研究を発展させています。このようにパチェラーこそ、わが国の本格的なアイヌ語・文化研究の先駆者といえます。



パチェラー夫妻と八重子(前列右)、弟山雄(後列右)

向井(パチェラー)八重子(1884-1962)、遠星北斗(1902-1929)のこと

八重子は、1884年(明治17年)6月13日、北海道伊達町有珠のアイヌ豪族の父向井富蔵(アイヌ名

モロッチャロ)・母フチッセの6人兄弟の次女として生れます。八重子(フチ)・弟に山雄(1890年生まれ)がいます。父富蔵は、パチェラーがはじめて有珠を訪ねた時から知り合いとなり、幼い八重子もパチェラーによくなついていたといわれます。父は、相当な見識を持ち時勢を見る目もあり、財力も胆振国第1位を占めていた時期もあったといわれます。進歩的な人で八重子7歳の時に洗礼を受けさせています。八重子11歳の春、父は死去しますが、遺言により、葬儀はキリスト教で行っています。

その後、家屋敷を騙されて小野正次郎に奪われますが、伊達町の人々はその不正を知って小野正次郎はまったく信用を失ったといわれます。後年、八重子の弟・山雄が伊達町の町会議員となり、父に代わって活動しています。

八重子は、13歳の時札幌に出て、パチェラーの「アイヌ・ガール・スクール」に学び、1902年(明治35年)東京の聖ヒルダ神学校(香蘭女学校)に進学、18歳の時から、パチェラーの聖公会伝道師としてアイヌ伝道に活躍します。1906年(明治39年)10月30日、八重子はパチェラー夫妻の養女となります。パチェラー53歳・ルイザ64歳・八重子22歳でした。その契約書には「向井フチ八養父ジョン・パチェラー、養母ルイザ・パチェラーノ精神ヲ継承シテ同胞ヲ救ハン事ヲ生涯ノ勤メト為シ且ツ之ヲ永遠ニ伝フル事」とあり、八重子は、その通りの生涯を送ったのでした。八重子は、英語・アイヌ語・日本語を使い分けて訪問客や養母ルイザの通訳をしながらアイヌ人伝道に励みます。

1901年(明治41年)、八重子は養父母とともに、シベリア鉄道経由で英国に行き、カンタベリー大主教から伝道師として任命を受け、滞在中、英国各地で講演を行っています。帰国後は、日本聖公会の幌別・平取の聖公会教会で伝道活動をしています。また、1912年(明治45年)7月、樺太伝道旅行、1919年(大正8年)美唄炭鉱・夕張炭鉱に働く挑戦人労働者への伝道にも出かけています。

八重子は、この頃から同族の悲惨な状態に心を痛めて、折々に詠んだ短歌を保存していました。それが、金田一京助の知るところとなり、1931年(昭和6年)4月10日、歌集「若きウタリ(同族)に」(竹柏会・東京堂発行)として出版されます。これには、金田一京助・佐々木信綱・新村出が序文を寄せています。これは、アイヌの誇りと悲しみを高らかに歌い上げた歌集で、アイヌ人が、初めて日本語で書いた魂の叫びといわれます。

また、八重子を敬慕していたアイヌ歌人、遼星北斗(余市生まれ・本名滝次郎、1902 - 1929)は、1914年(大正3年)小学校卒業後、出稼ぎなどで職を転々としますが、各地でアイヌの地位向上の運動を始めます。1927年(昭和2年)には、平取に滞在してパチラー幼稚園で働いています。翌年には、売薬行商として各地を回ります。その後結核に罹り1929年(昭和4年)、27歳の若さで死亡しますが、アイヌ民族の差別的な状況に激しい怒りの声を投げつけた短歌は、遺歌文集「コタン」(希望社・後年草風館発行)に収められています。(北斗の句碑「春浅き鯉の浦や雪五尺」が余市水族館前に建てられています。また、二風谷小学校前には、短歌2首の歌碑があります。)

1936年(昭和11年)4月、養母ルイザが死去。1940年(昭和15年)養父パチェラーの帰国、そして4年後に死去という悲しみに耐えて、八重子は、弟の向井山雄が司祭をしていた有珠のパチェラー夫妻記念教会堂近くの自宅で、養父パチェラーの愛読書250冊や遺品を守りながら静かに暮らしていました。1962年(昭和37年)4月、たまたま、かつて世話をした韓国人の招きで関西方面へ旅行中、京都で急逝したのでした。4月29日死去、77歳の独身の生涯でした。

パチェラーの晩年

時代は、太平洋戦争への突入により、敵性外国人として帰国を余儀なくさせます。1940年(昭和15年)12月、この時、86歳のパチェラーは、「必ず戻る」と八重子に言い残して、姪のアンデレスとともに日本を去りました。在日64年間でした。カナダのバンクーバー島の親類宅に2年間滞在します。

再び日本に帰りたい気持ちで待機していたのではないかとわれています。英国の郷里へ戻ってからも、パチェラーは、戦火がおさまったらまた、アイヌの人々のもとへ戻りたいと願っていました。パチェラーは、帰国の時も、ルイザ夫人の遺骨は円山墓地に残したままでした。それは、早くから夫妻ともに日本に骨を埋める決意をしていたからでした。英国の郷里アクフィールドの生家で、アンデレスが最後まで世話をしていましたが、1944年(昭和19年)4月2日、脳溢血のために、90歳の生涯を終えています。

その報せが日本に届いたのは、2年後の1946年(昭和21年)8月でした。パチェラーを慕うアイヌの人々は、各地で追悼集会を開き、彼の功績を偲んだといわれます。平取町二風谷には、その功績を後世に伝えるため「パチェラー保育園」が開設されています。そして、遠く離れた英国アクフィールド村にも、ジョン・パチェラー記念碑が建てられています。中央部分に大きな北海道地図が浮き彫りにされ、漢字の「愛」一文字と「ホッカイドウ・ジャパン」という言葉が刻まれています。この記念碑は、平取を中心としたアイヌの人々の献金によって建設されています。「アイヌの父」ジョン・パチェラーは、いつまでも、北海道に住むアイヌの人々の心の中に生き続けているといえましょう。

パチェラーを記念するもの

ジョン・パチェラー家跡(史跡：登別市青葉町 32-1)

1886年(明治19年)5月、パチェラーは、家族と共に、函館から幌別に移り、以後、札幌に転居するまでの6年間、ここを拠点として、布教活動をしています。現在、その牧場で牛を飼い、農作もしていた邸宅跡の敷石とイチイ・ポプラの木、池の跡が僅かに面影をとどめています。(史跡に指定)

パチェラー保育園(沙流郡平取町本町 65-2)

1895年(明治28年)5月、パチェラーが、自費で建てた教会堂を記念して、現在、「パチェラー保育園」として運営を続けています。

パチェラー夫妻記念教会堂(伊達市向有珠 119)

1896年(明治29年)、パチェラーが建てた木造の教会を、1937年(昭和12年)、アイヌ民族で最初の司祭となった向井山雄氏らが、パチェラー夫妻の功績を讃えて石造りの記念堂として改築しました。現在は、「パチェラー夫妻記念教会堂」として保存されています。

パチェラー博士旧宅(札幌市中央区北3条西9丁目、北大植物園内)

1898年(明治31年)建築のパチェラー博士の旧宅は、もと北3条西7丁目(北海道庁裏)にありました。1941年(昭和16年)の博士の帰国後は、財団法人パチェラー学園が管理、1953年(昭和28年)北海道に譲渡、1962年(昭和37年)に遺品とともに北海道大学に寄贈されて、翌年植物園内に移築。1964年(昭和39年)から1985年(昭和60年)まで、農学部付属博物館分館、通称「アイヌ博物館」として開館されましたが、現在は、一般公開せず収蔵庫として利用されています。非公開ですが、2階には、パチェラー博士ゆかりの家具・写真・図書資料などを展示した記念室があります。

あとがき

世界の多くの先住民族、アメリカのネイティブアメリカン(インディアン)・オーストラリアのアボリジニ・アラスカのイヌイト(エスキモー)、日本のアイヌ・・・などが、不当な侵略抑圧を受けてきた歴史的経緯については周知のとおりですが、1993年の「国際先住民年」を契機として、世界の先住民(少数民族)の復権運動に対する関心が高まり、複数の民族が共生する社会をめざす相互理解へのさまざまな取り組みがなされています。

日本では、1899年(明治32年3月2日)以来の「北海道旧土人保護法」が廃止されて、やっと、1997年(平成9)、「アイヌ文化振興法」(アイヌ新法)が成立した今日、単なる伝統的風習への関心や観光的

な視点だけでなく、真に差別や偏見を超えたアイヌ民族の文化や生活権を尊重した共生社会が求められているのではないのでしょうか。近年のアメリカ訪問団の来道においても、必ず、アイヌ民族問題がテーマのひとつとして上げられています。

<主な参考文献及び参考資料>

「第四集 ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版 「ジョン・パチェラー自叙伝 我が記憶をたどって」文録社 「アイヌの父、ジョン・パチェラー」仁多見 巖著 楡書房 「ジョン・パチェラーの手紙」仁多見 巖訳編 山本書店 「開拓につくした人びと」第七巻 北海道総務部文書課編集 理論社刊 平取聖公会宣教百三十周年記念誌「主に愛されて生きる」(日本聖公会北海道教区平取聖公会) 「郷土史ふれない」振内郷土史編集委員会編 「語りつく平取」平取町編集発行 平取町二風谷の現地取材資料 インターネット資料など

平成23年度 第2回 国際交流ランチセミナー記録 ～ハロウィーンパーティー・異文化交流の昼食交流会～

日時 平成23年10月29日(土) 11時00分～14時30
会場 すみれホテル 2Fレストラン「ルピナス」(中央区区北1条西2丁目)

<ゲスト>

徐 人	ソ イン	北海学園大学留学生 (韓国)	F
朴 全愚	パク ゼウ	北海学園大学留学生 (韓国)	F
李 琦	リ チ	小樽商科大学留学生 (中国)	F
郭 慶翔	クオ チンショウ	小樽商科大学留学生 (中国)	M
劉 懐明	リュウ ホワイミン	小樽商科大学留学生 (中国)	M
Ben Montgomery	ベン・モンゴメリー	札幌大学留学生 (イギリス)	M
Sharnnie Morris	シャーニー・モリス	札幌静修高校留学生 (オーストラリア)	F
Alyssa Goodman	アリッサ・グッドマン	札幌静修高校留学生 (オーストラリア)	F
Kelvin Wong	ケルビン・ウォン	札幌市ALT (カナダ)	M
Alicia Bechtle	アリッサ・ベクトル	札幌市在住者 (アメリカ)	F
Raula Noguchi	ローラ ノグチ	札幌市在住者 (アメリカ)	F
Chris Juday	クリス ジュデイ	札幌市在住者 (アメリカ)	M
Allen Paul Heffel	アレン ヘッフェル	札幌市在住者 (アメリカ)	M
Solanki Mahavir	ソランキ・マハヴィル	札幌市在住者 (インド)	M

概要: この国際交流ランチセミナーは、2001年(平成13年)から、広く多国籍の北海道在住外国人をゲストとしてお招きして、国際交流や異文化理解の楽しい時間を共有しています。今回は31回目です。今回は、アメリカの祭日「ハロウィーン October31」をテーマにして、日本や世界各国の伝統行事などと比較しながら、ハロウィーンの起源のお話や実際のジャコウランタン作りなどを楽しみたいと思います。一つのテーブル(8名)に2名～3名の外国人ゲストという豪華な国際交流の時間となりました。ここにゲストのスピーチの一部をご紹介します。今回の参加者は、ゲスト14名、合計57名でした。(通訳は、会員の岩崎修子さんをお願いしました。)

1、ソランキ・マハヴィル (インド・男性)

皆さまこんにちは。今日はハロウィーンパーティにお招きいただきましてありがとうございます。私が日本に来ましたのは1997年です。北大で、日本語および日本の仏教について学びました。その後も日本でビジネスを営みながら滞在しており、現在は、札幌でレストラン経営をしています。

インドでは「ハロウィーン」のお祝いはしませんが、ちょうど同じ時期に、ヒンドゥー教3大祭りのひとつ、「ディワリー」というお祭りがあります。家業の繁栄を願って各家の戸口に灯明を飾って祝います。都会に働きに出ている人も実家に帰り、家族揃ってお祝いをします。10月下旬~11月に盛大に行われます。今日はどうもありがとうございました。

2、ソ・イン (韓国・女性) <日本語で>

こんにちは。私は、韓国のデジョン大学に在学していて、今は北海学園大学に交換留学生として来ています。今日は楽しいパーティで、本当にありがとうございます。

韓国では、この時期に「チュソク(秋夕)」という大きな行事があります。韓国ではこの「秋夕」と「旧正月」には、親族が集まる慣わしで、遠くから集まった一族で先祖の墓参りをしたり、親やおばあさんに挨拶をします。これは韓国で大きい2つの行事のうちのひとつです。この日は家族や知り合いが集まり、皆でわいわいするところはハロウィーンと重なるところがあるのじゃないかなと思います。今日は、ほんとにすばらしいパーティで、楽しんでます。

3、ベン・モンゴメリー (英国・男性)

皆様、こんにちは。ベン・モンゴメリーと申します。英国から来ました。札幌大学で日本語を勉強しています。でもまだあまりうまく話せなくてすみません。

イギリスでも、米国の映画やTVの影響で「ハロウィーン」は人気になっています。子供の時はそうでもありませんでした。トリックオアトリートなども、特に私の住んでいたところでは夜間の外出は危険なこともあって、あまり行われていませんでした。でも今はずっと行われるようになってきています。ハロウィーンは英国ではむしろ大人にとっても人気があり、というのも英国人は外出して、お酒を飲むのが好きなので、いろんな仮装をして出かけお酒を飲んで楽しむ、ということになっています。きょうは、みなさんと楽しんでます。お招きいただきありがとうございます。

4、パク・ゼウ (韓国・女性) <日本語で>

私は英語で話すと通じないので、日本語で話します。どこの国でも、留学したらその国の言葉を勉強するために留学するのだから、日本語は上手ではありませんが、日本語で話したほうがいいと思います。私もソ・インさんと同じく、北海学園大学の留学生です。中国人の留学生が沢山います。みんな、来たばかりなのに英語で話しているのを聞き、私は、どうやって聞いたらよいか、話したらよいか戸惑っています。今日は楽しんでます。どうもありがとうございます。

5、シャーニー・モリス (オーストラリア・女性)

オーストラリアでは、「ハロウィーン」は全く人気がありません。お祝いする人はあまりいません。でもこの時期、メルボルンには祝日があり、その日には競馬が行われます。皆家族や友人と見に行きますが、うちの家族はキャンプに行っ楽しんで、競馬はテレビで見ます。

他に、「オーストラリアの日」という大きなお祭りがあります。1788年1月26日の英国からの独立をお祝いする日です。この日は家族や友人、みんなで集まります。オーストラリアの気候ではとても暑い日が続くので、みんなでバーベキューをしたりして楽しめます。教は、ありがとうございました。

6、クオ(カク)・チンショウ (中国・男性)

皆様、こんにちは。私は「郭、かくさん、と申します。中国から参りまして、現在 23 歳です。中国語、日本語、英語が話せます。中国にいた頃、大学で4年間日本語を学びました。小樽商科大学に来て、日本語に関してまだまだたくさん学ぶことがあったと実感しました。

こちらに来て1か月になりますが、日本で一番印象深かったのは、日本人が礼儀正しいこと、そして街がきれいであるということです。例を申し上げますと、こちらに来た時、銀行に行こうとして道に迷ってしまいました。それでそばにいた年配の女性に聞いたのです。その老婦人は、銀行への道を教えてくれ、銀行に着くまで送ってくれました。銀行までは結構距離があったのに、そうしてくれたのです。そのことをとても感謝しております。日本人は礼儀正しいと思いました。

それから街がとてもきれいなこと。紙切れすらも路上に落ちていません。これには驚きました。中国ではどこでもごみが落ちているからです。しかも日本人はごみを捨てる時、ただゴミ箱にいれるだけではなく、分別してから捨てます。中国人は分別しないでただゴミ箱に捨てるだけです。

それから日本と中国との違いをお話しますと、車は日本では左通行ですが、中国では右側を通ります。それから、日本では水道水を直接飲むことが出来ますが、中国では水道水をそのまま飲むことはできません。それから大型の電気製品を捨てる時にも違いがあります。中国ではそれを使いたい人がお金を払ってくれますが、日本では捨てる人がお金を払わなければなりません。これが大きな違いだと思います。以上です。今日は、お招きいただきありがとうございました。

7、クリス・ジュディ (アメリカ・男性)

皆様、こんにちは。クリス・ジュディと申します。アメリカから来ました。この北海道・マサチューセッツ協会のパーティに参加するのは2回目です。今日はお招きいただきありがとうございます。

ハロウィーンについてですが、自分が子供のころは、我が家では、家族はハロウィーンをしていませんでした。近所の子供がうちに来て「トリックオアトリート」をすることはあったものの、自分たちが出かけ行ってするということはありませんでした。ベンも同じことを言っていたと思いますが、最近では、米国でもハロウィーンは子供ではなく、むしろ大人が仮装パーティなどをして楽しむものになってきています。そういえば、ベン(注：身長2メートル3センチ)が今日参加してくれてよかったと思います。このパーティーで一番背が高いのが自分ではなくなったので…(笑)

まあ、私の個人的な意見ではありますが、私の世代においては、アメリカのハロウィーンは昔ほど人気なくなっているような気がします。ご清聴ありがとうございました。

8、アリッサ・ベクトル (アメリカ・女性)

私は、アリッサ・ベクトルと申します。ローラやクリスと同じく、札幌の恵みキリスト協会に所属しております。そこで英語を教えたり、またゴスペル音楽のチームで活動しています。アメリカのインディアナ州から参りました。

ハロウィーンについては、子供のころは、仮装して良く知っている近所の家に「トリックオアトリート」に行ったりしていました。でも最近では、家族連れで子供はむしろ教会での「秋祭り」(感謝祭)に行くことが多くなっています。そこでは、ゲームをしたり、お菓子を食べたりして安全に遊べるので、家族のひとたちも心配する必要がありません。以上です。ありがとうございました。

9、ローラ・ノグチ (アメリカ・女性)

ローラ・ノグチと申します。アメリカのインディアナ州から来ました。ハロウィーンについては、クリスやアリシアがお話したように、最近では、アメリカで「変な人」がいて危険なので、うちでは出かけることもしませんでした。そしてアリシアも言っていました、教会で「秋の収穫祭」を

し、ドレスアップしてゲームをし、キャンディをもらう、ということをしています。それが子供のときの思い出ですね。今、皆さんのテーブルの上に3角形コーンの形の小さなお菓子<事務局注：今回ボストンの友人から送ってもらったものです>がありますが、私が子供のとき、ハロウィーンでいつも食べていたお菓子でした。ここで見ることができ、とてもうれしいです。甘くておいしいので、ぜひ食べてみてください。皆さんありがとうございました。

10、アレン・ヘッフェル (アメリカ・男性)

こんにちは。私は、米ロサンジェルスの小さな町、パサディナから来ました。子供のころは、父と妹と3人でいつも6個のカボチャを買いました。そしてそれぞれ二個ずつ、カボチャ大王作りをしました。ひどく散らかるので、母は参加しませんでした。私の街では、みんなが「トリックオアトリート」に出かけました。小学校、中学校、高校と、友人の90パーセントは、ドレスアップして、町中が「トリックオアトリート」をしていました。小学生のうち「トリックオアトリート」を楽しんで、大きくなって高校生くらいになると、「トリックオアトリート」をする弟や妹の面倒を見ました。そして、小さな子供たちが「トリックオアトリート」から帰ってくると、こんどは自分たちがハロウィーンパーティに出かけたのです。そして、それが終わって帰ってきたら、今度は大人たちが遅い時間にハロウィーンパーティに出かけます。

今日はここに來られてとてもうれしく思います。というも、過去2年間、全くハロウィーンをしていなかったからです。今日は、ほんとうにありがとうございました。

11、リ・チ (中国・女性) <日本語で>

皆さん、こんにちは。私はリ・チと申します。小樽商科大学の研究生です。私とリュウさんとカクさんは、一か月前に小樽に着きました。私もカクさんと同じように、中国の大学で日本について4年間勉強しました。それまでは日本に來たことがなかったです。日本については全て教科書で勉強しました。日本の文化や日本人について勉強して、今こちらに來て、みんなと交流すると、日本人や日本の文化だけではなく様々なことを学べます。今は多くの日本人の友人がいますが、日本人の友達と交流して、日本人はとても親切であるということが分かりました。これから2年間、日本に滞在しますが、いろいろなところへ行き、またもっともっと日本人の友達を作りたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

12、アリッサ・グッドマン (オーストラリア・女性)

こんにちは。アリッサと申します。シャーニーも言っていました、オーストラリアではあまりハロウィーンを祝いません。でも私は、いとこと一緒に「トリックオアトリート」に出かけていました。でも大きくなったので今はしていません。シャーニーと私が最初日本に來たとき、ハロウィーンの飾りつけが多いのに驚きました。

今は日本の滞在を満喫しています。いろいろな都市に行きましたが、その違いに驚かされ、現代的な建物や古いお寺があったりするのを興味深く思います。また日本とオーストラリアの違いについても興味深いです。またぜひ友達を数人連れて日本に戻ってきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

13、リュウ・ホワイミン (中国・男性)

今日は、皆さんにお会いできてうれしく思います。最初日本に來て間もない頃、虫がカーテンの後ろにかくれているのを発見しました。もう出てくるな、と言いましたが、また出てきました。というも、私の日本語がまだうまくなかった、日本の虫に日本語で「出ていけ」と言っても通じなかったのです。ですから今ここでは英語で話すことにします。

私は中国から来ました。中国のことについて話す場合、必ず中国の人口は大変多いという問題です。それ自体はいいことだと思いますが、でも将来さらに増えていくことは心配なことです。

日本に来るのは2回目ですが、最初の時は皆さんとお話する機会が無くて残念でした。今回は、皆さんとたくさん話したいと思います。また、私はとても旅をするのが好きなので、いい場所をご存知でしたらぜひ教えてください。日本語で、ぜひ話しかけてください。どうぞよろしくお願いいたします。

14. ケルビン・ウォン（カナダ・男性）

私は、ケルビン・ウォンと申します。現在JETプログラムで来日しまして、ALTをしております。日本の学校で、日本人の先生の英語の授業のお手伝いをしています。

日本で、ハロウィーンパーティに出席するのは初めてです。お招きいただいたことにお礼を申し上げます。カナダのハロウィーンについてお話します。残念ながら小学校の時の体験しかお話できません。中学校・高校・大学と、日本に来るまではハロウィーンのお祝いをしていませんでした。

米国と同じように、カナダでもハロウィーンには仮装をしていました。私は何の扮装だったかわかりませんが、全身緑でひどい格好だったと思います。家から家へ行き、「トリックオアトリート」をし、キャンディをもらっていました。その後で、アメリカと同様、親がキャンディを調べて、安全に食べられるものかどうかチェックをします。

日本に来てから、ハロウィーンパーティが、特にここに滞在している外国人の間で盛んにおこなわれていることが分かりました。そして子供の時以来10年ぶりに、ハロウィーンの仮装の楽しさを思い出し、この数年間、ハロウィーンを見られる機会を楽しんでいます。以上です。ありがとうございました。



北海道を知る歴史発見の旅シリーズ 歴史探訪ツアー 実施報告 平成23年度 第2回 小樽 歴史探訪コース(日帰りコース)

大型で強い台風12号のため、9月4日中止 9月11日(日)に変更して実施しました。

小樽の歴史探訪コース 実施概要

【小樽の歴史】

小樽近代の歴史は、北海道がまだ「蝦夷地」と呼ばれていた「近世アイヌ期」に、「オタルナイ(アイヌ語で砂の中の川の意味)川」の河口に松前藩によって開かれたオタルナイ場所、於古発(オコパチ)川以西のタカシマ場所、塩谷以西のオシヨロ場所などの和人人植にはじまります。これら三場所と渡島国や本州への北前船の航路により発展していきます。

1857年(安政4年)～1861年(文久元年)、箱館奉行の許可を得た小樽場所請負人恵比須屋半兵衛の小樽 銭函間道路開削。そして開拓使時代のジョセフ・クロフォード(1842-1924)により小樽～札幌間の道路建設(1879・明治12年)、「幌内鉄道」が開通(1880・明治13年 1882・明治15年)します。幌内鉄道は、幌内(三笠市)の石炭を手宮まで輸送するのが目的でした。さらに小樽港から船で東京方面に運ばれました。こうして港町小樽は、北海道の産業・経済・金融の拠点として飛躍的に発展していきます。

1876年(明治9年)あのクラーク博士(1826-1886)、ホイラー、ペンハローの一行が黒田清隆(1840-1900)らと開拓使御用船玄武丸で上陸したのも小樽(手宮)です。銭函を越えて札幌に入り、1876年(明治9年)8月14日札幌農学校を開校します。

1906年(明治39年)には、「旧日本郵船小樽支店」で、11月13日から数日間、日露戦争後のポーツマス条約に基づく第2回の樺太日露国境画定会議<第1回会議は、6月ロシア領内で開催>が開かれました、その2階会議室・貴賓室が、今日も保存され、国の重要文化財に指定されています。

【歴史探訪コース】

札幌駅発～下手稲通り(山口運河)～<高速>～小樽運河散策 歴史探訪(北一硝子・小樽オルゴール堂・小樽の原点オタルナイ運上屋跡)～祝津展望台～鯉御殿 旧青山別邸見学&昼食会～歴史探訪(小樽市総合博物館・旧日本郵船小樽支店・日銀旧小樽支店金融資料館(海陽亭))～(田中酒造亀甲蔵・ザグラススタジオ・おたるワインギャラリー)～<高速>～札幌駅着



小樽市総合博物館「ジョセフ・クロフォード」銅像前にて

～七飯町姉妹交流訪問団 73 名がコンコードへ～

七飯町派遣研修訪問団 14 名と七飯高校姉妹校交流訪問団 59 名の総勢 73 名が、9 月 23 日～10 月 4 日(七飯高校は～10 月 2 日)の日程で姉妹都市コンコードを訪問してきました。今回は、平成 9 年(1997 年)に七飯町とコンコード町が姉妹提携を結んで以来、最大の訪問団人数でした。コンコード町の皆様との交流を一層深め、参加者たちはたくさんの思い出と友情をお土産に七飯に帰ってきました。

滞在中は、全員がホームステイをして交流を深めた他、七飯高校吹奏楽局はコンコードカーライル高校コンサートバンドとの合同の演奏会、全校生徒へのコンサート、小学生へのコンサートなど計 4 回の演奏会を開催。コンサートのオープニングには、七飯高校生徒による和太鼓の演奏も披露し、観客から盛大な拍手をいただきコンサートは大成功。多くのコンコード町民へ感動を与えました。緊張の中にも精一杯実力を出し切りやり遂げられたことは、参加した生徒にとって今後の人生の大きな糧になったと思います。

また、学校間交流では、高校内にあるラジオ局、テレビ局での生出演や一緒に授業や部活動に参加させていただくなど多くの経験をさせていただきました。将来を担う子ども達が自分の目や耳で直接体験することは計り知れないすばらしい経験であり、大変貴重な財産になったことと思います。

この訪問団を受け入れていただくにあたり、事前の準備から滞在中の引率など、CCNN のメンバー、ホストファミリーの皆さんをはじめ、コンコード町の方々のご努力に心より感謝申し上げます。

来年は姉妹都市提携から 15 周年という記念の年を迎えますので、これまでの姉妹都市交流のあゆみを振り返り、両町がお互いの志を高めて、さらに世界平和のため、より一層の友好関係を続けてまいりたいと思います。(CCNN：コンコードカーライル七飯ネットワーク)

ホストファミリーとの対面(高校カフェにて)



和太鼓演奏(高校音楽ホールにて)



合同演奏会(高校音楽ホールにて)



日本舞踊披露(歓迎パーティーにて)



事務局短信

国際交流ランチセミナー…次代を担う若い人の参加を歓迎

「みんなで楽しむ国際交流」を目標に実施。ブッフスタイルの食事を楽しみながら、テーブル毎に英語・日本語で国際交流の会話がはずみます。堅苦しい挨拶やセレモニーは省略です。ベビーカークの乳幼児から小学生、中学生・高校生も沢山参加しています。外国人ゲストは第1回11名・第2回は14名でした。今回のハロウィーンは、ジャッコランタン作り・衣装などで賑やかでした。

2011 英語でガイドしよう実践講座(7月～11月) 実施概要

今年度の「英語でガイドしよう実践講座」は、予定通り、5月～11月(毎月1回・5回コース)で実施しました。外国人講師として、メラニー・ヤマザキ(ニュージーランド)、アレン・ヘッフェル(アメリカ)の2名を招き、日本人英語スタッフ6名で、参加者21名を、4グループに分けて、時計台・赤れんが庁舎・北海道の歴史・テレビ塔・大通公園・地下街・地下鉄・ラーメン・カニ・回転寿司・ジギスカンなどをテーマに実践トレーニングを実施しました。テキストは、総頁53頁になりました。

新入会員紹介(2011年7月31日以降):敬称略

<個人会員> 水野 彩子 滝川 宗豊

北海道・マサチューセッツ協会 平成24年度の事業予定について

国際交流ランチセミナー

平成13年度(2001年)から、毎年3回、多国籍の外国人ゲストを多数お招きして、国際交流や異文化理解の楽しい昼食会として実施しています。これまで31回実施しています。札幌・小樽の各大学留学生や札幌在住の外国人、またノーブルズ高校グループやファイブカレッジセンターグループもゲストとしてお迎えしています。今回は2月11日です。新年度も継続実施の予定です。

北海道を知る歴史発見の旅/名古屋ポストン美術館の旅シリーズなど

「北海道を知る歴史発見の旅」は、平成14年度(2002年)～平成22年度(2010年)の9年間、35回実施。約700名の方々が参加されました。札幌圏のコースは、これで終了。毎回編集した「歴史資料集」も、貴重な財産となっています。今年度は、新企画で、「函館・七飯歴史探訪コース」(6月4日-5日)、「小樽歴史探訪コース」(9月11日)を実施しました。新年度については、検討中です。

第4回「名古屋ポストン美術館の旅」は、「2012名古屋ポストン美術館展鑑賞と善光寺参りツアー」<2012年6月1日(金)～3日(日)>として企画中です。2009年の「お伊勢参り」に続いて、「長野善光寺参り」を実現したいと考えています。追って正式ご案内いたします。ぜひご参加ください。

交流推進事業 = 姉妹提携20周年記念事業としてスタート

英会話教室 = 2009年「高校生のための通訳ガイド養成講座」(全10回)。2010年「英語でガイドしよう講座」(全10回)。そして、2011年「英語でガイドしよう実践講座」(全5回)を少人数(21名)で実施しました。現在、継続実施を検討中です。

訪問団交流事業

近年の不況で、マサチューセッツ州への訪問団派遣は困難な状況が続いています。新年度については、マサチューセッツ州からの訪問団来訪予定があります。コンコードカーライル高校グループの来道(4月10日-13日七飯、14日-17日札幌)。ノーブルズ高校グループ(6月15日-7月2日)やファイブカレッジセンターグループ(7月上旬)の来道も予定されています。詳細は、連絡調整中です。

